

# 鳩の海

高田 友

鳩鳥にほどりの葛飾早稻かつしかわせを贅にへすともその愛かなしきを外とに立てめやも（萬葉東歌）

「早稻を贅す」とは「新穀を神に捧ぐる」を言ふ。妾われは神事たづさに携たづさはりてあり、身を汚すの儀戒められたれば、愛いとしき君の訪ね來たりと雖も、床に引き入るれば破戒たり。ああ、然れども、今君我家わぎへの外に立ちて戸の開くを待つ。縦令たとひ神罰あらんとも、何條なんであう斯くはあるべき。よしや入りたまへ、今宵は君とともにあらむ。

葛飾は下總國葛飾郡なれど此こほりの郡は頗る廣く、その中にて、早稻にて知られたるは埼玉縣三郷市なりとぞ傳へらるる。他に傍證ありて、この歌三郷の乙女の作なりとぞ。

鳩にほとは何ぞや。すなはち鸕鷀かじつぶりへへキテイなる鳥の名なり。淡水に棲み、小魚を餌とすれど、「かいつぶり」の「かい」は「貝かひ」にはあらで、「搔き」の音便。また古語にては「もぐる」を「むぐる」と言ひしによりて、「搔きつ潜りつ」の轉じて「かいつぶり・かいつぶり」とは轉じたりと言ふ。なほ、ヨとウは相通ずるによりて、「つむり」の「つぶり」にこそは化したるなれ。

鳩は鸕鷀かじつぶりの古名なるによりて、五音の「鳩鳥の」は「かつく（潜）」の枕詞となり、轉じて初音「かづ」ならぬ「かつ」なる「葛飾」を引き出さんが爲に用ゐらるる。

「鸕鷀・鳩・鳩鳥」は琵琶湖あふみのうみ（近江海）に數多棲息するによりて、琵琶湖を「鳩の海」と謂ふ。今日、滋賀縣の「縣鳥」はこの鳥なり。

俊成卿女左の如くに詠へり。

にほのうみ春はかすみの志賀の波花に吹きなす比良の山風

さて、新古今集に家隆の名高き歌あり。

鳩の海や月の光のうつろへば浪の花にも秋は見えけり

「浪の花」は現今は「鹽」の謂ひなれど、古語にては「波頭」を言ふ。波頭の白く砕くるが花を彷彿せしむればならむ。現代中國語にても「波頭」を「浪花 langhua」と言へば、怕るらくは漢語より和語に入りたるべし。

臺灣の歌謡曲に「愛在夕陽下」とて、左の如き歌詞あり。

夕陽底晚風裡 我和你並肩在一起

夕陽就像你 浪花就像我

(internet《愛在夕陽下 mp4》)

「夕陽の底晚風の裡 我と汝と肩を並べてともに在り 夕陽すなはち你に像る 浪の花すなはち我の像し」と訓みてむ。女の心にて、「汝の光によりて我輝く」との謂ひならむか。

俊成卿女の歌また「霞みて見ゆる波も、風に吹かれて波頭白く花のごとくなりにけり」との美しき光景を目の當たりにするかとなむ思ほゆる。

家隆一首の意は「近江の海、月光の移り行くを見れば、波頭にも秋の來れる色定かなり」との由。

古今集・文屋康秀の歌に曰く

草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける

康秀は「草木は季節とともに移ろへど、浪の花は春夏秋冬色變るなし」と歌ひたるなり。

家隆、これに異を立て、「近江の海には、秋の來れば月の光うつろひ、波頭の色を見るにつけても、その儀著らかなり」と唱へたり。

波頭の色變ずとの歌意につきて、古來の解釋は「月には桂の木の生ふるあり。秋風吹けば桂の木の紅葉して、月面の色變じ、波頭に映ゆる月光また皓皓たり。因りて、嗚呼秋の來れるなり、と感ずるを言ひたり」との由。

今、それがし、これを現代天文学に照らして解釋せむ。

太陽は夏には高く、冬に低きは世人よく知る所なり。

満月は地球より見れば、太陽の向ひ（正反對方向）にあり。しからばすなはち然則、夏には低く、冬には中天高くにあり。太陽と同じ義にて、高ければ明るく、低ければ暗し。夏より秋に遷るにつれて、太陽は次第に暗く、満月はいよいよ明し。

そもそも古人の「月に桂の木ありて、秋に色づく」とは、秋より冬にかけて、月光の輝き増すに氣付きて、これを解せんがために牽強附會したりけむ。

月を歌に詠むは、満月を取り上ぐるが常なり。ここにおいてか於是乎、家隆の歌もまた、「秋になりて、満月の輝き格別となれば、波頭に光る月光によりてその旨を知るを得」と歌ひたるならむ。

（令和三年十月二十日受附）